デウス・ウルト！　俺がそれを望んでいる！

Unknown

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

何故〝それ〟が生まれてきたのかは分からない。何がそうさせたのかも分からない。

だが、それはこの世に生まれその名に恥じぬ動きを見せた。

その者デウス級１番艦デウス。神の名を持つその艦は霧でありながらアドミラリティ・コードに従わずに自らの意志で世界の海を航行する

※基本的にアニメの方を基準として進んでいきます

目次

第一話「神の降臨」――1
第二話「神の誕生」――6
第三話「神の気の向くままに」――10
第四話「神は気まぐれ」――15
デウス級艦艇スペック＋α――20
第五話「神の漁」――26
第六話「欧州へ」――32
第七話「復讐者」――37
第八話「マルタ島」――42
第九話「マルタ島の改造」――46

第一話「神の降臨」

霧の艦隊。突如霧と共に現れたそれらは瞬く間に人類の敵と化した。人類が持つ化学力を超える超兵器を積んだそれらは第二次世界大戦時の艦艇に酷似しているもののそのスペックはけた違いだった。人類は呆気なく制海権と制空権を奪われた。海は人類のものではなくなったのである。

無論、その状況を良しとしている人類ではない。直ぐに艦隊が編成され反攻作戦が開始された。が、それらすべてを尽く惨敗で終わった。クラインフィールドと呼ばれるバリアを展開した霧の前に人類は傷一つつける事が出来なかったのだ。そして最後の大海戦で人類は完全に敗北し海を取り戻す事は出来なくなった。

以来7年、霧により海路を封じられ物流が滞った人類は少しずつ疲弊し滅亡へと近づいて行った。幸いなのは霧が展開するのは海上のみであり陸には沿岸部を除き攻撃を受ける事は無かったという事だ。もし沿岸部のみならず内陸部にまで攻撃を受けていれば人類は滅亡一歩手前まで来ていただろう。

もはや人類に打つ手はない。そんな状況だがそれでもあきらめないのが人類だ。日本では健在かどうかも分からないアメリカに向けて自国が開発した最新兵器のデータ

を乗せたロケットを打ち上げるなどの手を打っていた。
そんな状況にて、とある霧の船が発見された。モデルと思われる艦が存在せずそれでいて４００メートル近い巨大な船はまるで人類も霧も興味ないかのように我が道を進んでいた。時には人類を、時には霧を攻撃するその様は我が道を行くかの様で人類には恐れられ霧には警戒された。
後に蒼き鋼と呼ばれる霧の船を操る千早群像が接触に成功し自らを〝デウス（神）〟と名乗った事で人類はその艦の詳細を知る事が出来たが同時にその者の性格から霧とは別の脅威として認識されるようになった。
これはそんな霧の船にして神と名乗り全てに縛られずに我が道を行くデウス級艦４隻の物語である。

霧の東洋方面巡行艦隊に所属する駆逐艦アヤナミは不幸と言えた。霧の艦隊が人類を攻撃する理由たるアドミラリティ・コードに従い今日も人類から海を奪っていたのだ

が突如として攻撃を受けたのである。

アヤナミの近くには同じく駆逐艦と軽巡洋艦がいたがたった一発で半数が撃沈され続く二射目でアヤナミともう一隻を残して沈められた。いきなりの奇襲に驚くもすぐに周囲の探索を行えば〝それ〟はいた。何故気付かなかったのか不思議なくらいの巨大な船。総旗艦を務める超戦艦すらも小さいと感じさせるその巨体にはそれにふさわしい兵装がズラリと並んでおりその内のいくつかが自らの艦艇に向けられていた。

やられる！　そう思ったアヤナミがクラインフィールドを展開すると同時に放たれるビーム。間一髪でクラインフィールドの展開が早くその攻撃はバリアに阻まれた。しかし、それを待っていたとばかりに攻撃が続く。先程までの一発一発を発射するのとは違う全砲門による一斉射撃に加えて、雨の如きミサイルの攻撃。海中からもミサイルや魚雷が艦底を震わせる。

全方向から攻撃を受けるが未だクラインフィールドは臨界点、展開不能なほどのダメージを蓄積させるには至っていない。駆逐艦は霧の艦隊の中では最も弱い。相手はどう見ても戦艦を超える化け物。本来なら数発耐える事が精一杯のはずなのに既に10分は砲火の嵐を受けている。

これが何を意味するのか、アヤナミは理解できている。遊ばれているのだ。猫がネズミをいたぶるように、無垢な子供が列を作るアリを潰すように、目の前の船はアヤナミ

を相手に遊んでいるのである。

それを理解した時、アヤナミは初めて感情を手にする事が出来た。しかし、それが怒りかと問われれば否である。アヤナミが手にした感情は〝恐怖〟である。霧の艦隊以外で自らを害する事など出来なず、誕生からこれまでにこれほどの一方的な状況に出会った事は無かった。故にアヤナミは恐怖を覚えてしまったのだ。クラインフィールドが破られて全ての攻撃が艦艇を破壊するのではないか？　今にも高い火力の攻撃が来るのではないか？　アヤナミは初めて死への恐怖と同時に自分をここまでする相手への恐怖を覚えたのだ。

しかし、本来ならここで終わる筈だったがアヤナミの不幸はここで一度途切れる事になった。アヤナミの危機を察知して救援が駆け付けたのである。旧大日本帝国の艦艇の姿を模した仲間たちは同じ艦隊に所属する者達であった。

戦艦フソウを筆頭に重巡洋艦５、軽巡洋艦１０、駆逐艦多数で形成されたその艦隊は人類相手でも脅威と言える編成だった。しかし、そんなものはこの化け物には通用しなかった。

霧の艦隊の出現にその艦は標的を変えた。しかし、アヤナミが逃げられないようにするためか、その艦は一発だけ実弾の砲撃を行った。それはまだ６割近く残っていたアヤナミのクラインフィールドを易々と貫きスクリュー付近にて爆発を起こし速力を奪い

去った。

沈む事は無かったが逃げる事も戦う事も出来なくなったアヤナミの横を通り過ぎ、彼方から近づいてきた霧の艦隊に向かって行く。そこで、アヤナミは目の前の艦の上部に人、メンタルモデルがいるのを発見した。人類を理解する為に同じ人間の形を模しているがその全てが女性だった。しかし、目の前の艦には男が乗っていた。男はアヤナミに視線を向けるとにやりと笑い何かを呟いた。この程度の距離など遠いうちに入らないアヤナミはその言葉をしっかりと聞き取っていた。

「デウス・ウルト。神(俺)はそれを望んでいる」

第二話「神の誕生」

　その艦、デウス級1番艦が誕生した理由は不明である。本人すら把握していなかったが突如として誕生した。それは事実だった。

「ここは……」

　目を覚ましたデウスの視界には一面に広がる海と巨大な艦。自らの化身とも言える艦だった。最初こそ戸惑ったデウスだが、直ぐに情報を集めていく。霧の艦隊、アドミラリティ・コード、大海戦……。様々な情報を手に入れそれらを精査したデウスは悩む。自らも霧の艦と言う事は分かったがだからと言って従うべきなのか？　アドミラリティ・コードに従い人類から海を奪うべきなのか。

「……いや、違う」

　デウスはそこまで考えて答えを出した。結論は否である。何故神（デウス）の名を持つ俺がアドミラリティ・コードなどと言うよくわからないものに従わないといけないのか。そんな物に縛られる俺ではない、と。

　そう答えを出せばデウスが行うべき事は一つである。気ままに生きる。霧も人類も関係なく好きなように生き、好きなようにふるまい、好きなように過ごす。それがデウ

スが決めた事だった。

早速と言わんばかりにデウスは艦を出発させる。現在地は既に把握済みである。そして運が良い事に近くには霧の艦隊、それも軽巡洋艦を旗艦とした水雷戦隊がいた。自らの性能は理解するものの百聞は一見に如かずと言わんばかりに性能テストの為にその水雷戦隊へと襲い掛かった。

その結果、デウスは改めて自らの実力を把握した。超戦艦並みの演算速度にそれですら間に合わないような兵器の数々。これらを一人で運用するのは事実上不可能だった。

しかし、それを補うようにデウスはまさに神に相応しい能力を持っていた。メンタルコアとナノマテリアルの作成である。それらの能力を生かし、デウスは自分の艦の補助を行うメンタルコアを生み出した。これらを複数作る事でデウスは自らの艦の力を最大限生かせるようになった。

その後も性能テストとして霧の艦隊を襲撃した。ありとあらゆる兵装や機能を確かめ戦艦から潜水艦までありとあらゆる艦種に攻撃を行った。結果、霧の艦隊はデウスを危険と判断し攻撃を行おうとするも超戦艦すら超える力を持っている事はこれまでの戦闘から明白であり総力をもって戦った場合、共倒れになる可能性が高いと判断した。そして監視のみにする事にした。

それがデウスを討ち取る最後のチャンスだったと後に後悔することになる。

一方で、人類からもデウスの動きは把握出来ていた。霧の艦隊なら何処の奴でも構わないとばかりに太平洋のど真ん中から移動してきたデウスは、日本の沿岸部でも戦闘を行った。人類は霧の反乱かと思うが、それにしては様子が可笑しいうえに明らかにデウスの姿が異様だった事から新たな霧が誕生するも何らかの理由で単独行動を取っていると判断した。

それは日本にとって好機と捉えられた。もしデウスを最低でも協力者することができれば、最善としては拿捕し自分たちの戦力に出来ればこの状況を好転出来ると考え、デウスに使者を送った。数日後、使者は帰ってきた。死者となって。表皮をはがされ全身の血を抜かれた彼らとともに『神と対等と思うとはおこがましい』というメッセージが添えられていた。

神を自称する霧に日本は驚きと同時に怒りを見せた。使者を殺された事もそうだが、その傲慢な態度は見過ごせないものがあった。しかし、そんな彼らの意志を砕く様にデウスは日本の残存艦艇を攻撃し始めた。本拠地である横須賀基地には攻撃をせずにそこにいない船を狙って。しかもまるで彼我の差を分らせようとしているかのように、攻撃を受けた船は沈められるのではなく修復がギリギリ可能だが多くの資材を使わない

と難しいというレベルの損傷を受けた。まだ撃沈された方がよかったと言えるような状況に、日本はデウスに手を出す事を諦め、こちらに砲門が向かないように祈るような状況となった。

デウスはまさに災害と言えるような立ち位置に落ち着いた。霧も人類もデウスには近づかず、一定の距離を保とうとするが、デウスはその巨体を時折隠し、レーダーにも映らずに移動するようになり、その動きを察知する事が難しくなった。

「ふむ、人類の中でも素晴らしい言葉があるようだな」

そんな災害となったデウスは気にせずに今日も我が道を行く。

「デウス・ウルト！　神(俺)が！　それを望んでいる！」

この言葉はデウスを代表する言葉となり、彼は今後これを口癖のように連発していくことになる。

第三話「神の気の向くままに」

自らの性能テストを終えたデウスは日本近海を中心に動く事を決めた。理由は特になく、気づいたらこの付近で活動していただけである。そして今は水雷戦隊を沈め駆逐艦にも関わらずに適確な対応を見せるアヤナミを甚振るように遊び、救援に駆け付けた艦隊に狙いを定めた。

「デウス・ウルト！　貴様等の消滅を神(俺)は望んでいる！　故に、沈め」

瞬間、圧倒的な火力がデウスより放たれる。１０を超えるメンタルコアの補助を受けたデウスの攻撃は、霧の艦隊と言えど大きな損耗を免れられないほどだった。

戦艦フソウが先頭に出てデウスの攻撃を受け止めているがそれもそんなには持たない。精々後１０分ほどだろう。その間に他の艦艇が攻撃を行うがデウスのクラインフィールドは異常だった。三重に展開されるクラインフィールド。一枚目ですら蓄積するダメージは軽微であり、それが三つも展開されているという事実は絶望的なものだった。実際、それを目にしたアヤナミは既に絶望感で一杯になっている。

「戦艦フソウ、貴様が同胞を思う気持ちは理解した。だがな、そこに力が伴っていない限り無駄死にでしかない！」

戦艦フソウに集中していた攻撃を他の艦艇にも向けていく。それでいて戦艦フソウの動きを封じるように攻撃は継続しており、戦艦フソウが前面に出た意味を完全になくしていた。

駆逐艦は一撃で沈み、軽巡洋艦すら大破する。重巡洋艦のみが戦闘能力をもって耐えるころが出来たが、それはあくまで一撃を受けた場合のみである。何重にも渡って攻撃を受け戦艦フソウが連れて来た艦は沈んでいく。その沈んでいく艦にすら砲撃を加えていく。海底に付くころには破片しか残らない程の行いに、戦艦フソウのメンタルモデルは吼えた。

「っ！　何故だ！　何故我らを攻撃する！　貴様は霧の艦ではないのか!?」

「俺は俺だ。神は俺であり、俺は神である。アドミラリティ・コードなどと言うものに縛られる俺ではない！」

ついに戦艦フソウのクラインフィールドは臨界に達し、解除される。絶対の防御力を失った戦艦フソウの艦艇に次々と着弾するビームにミサイル。それらは艦底からもおこなわれ、表面は完全に破壊され中身がむき出しとなっていく。急速に沈みゆく自分の艦の上に立ったメンタルモデルにデウスは言った。

「最後だ。何か言いたい事があるのなら言うと言い」

「……せめてアヤナミだけでも助けてくれ」

その言葉を言い終えると同時に彼女の体はビームに包み込まれた。人間の心臓部にあったメンタルコアは欠片一つ残さず破壊され戦艦フソウと言う存在をこの世から完全に消し去った。主を失った艦艇はナノマテリアルに戻りその姿を消していく。デウスはそれらを回収すると艦を反転させてアヤナミの下に戻る。

仲間が撃沈されていく所を見る事しか出来なかったアヤナミには、既に抵抗の意志は残っていない。クラインフィールドが消失し、速力が失われた自分はこのまま沈んでいくのだろうと覚悟を決めた。

しかし、その瞬間デウスはにやりと笑みを浮かべた。

「戦艦フソウの遺言を守るわけではないが、貴様には生まれ変わるチャンスをくれてやろう」

デウスはそう言って戦艦フソウの艦艇だったナノマテリアルと自らが生み出したナノマテリアルを合わせてアヤナミへと注ぎ込む。

「神が一人だとは言わないさ。貴様には俺と同じ場所に立つ事を許可してやろう。駆逐艦アヤナミよ、我と同じデウス級の2番艦として生まれ変わるがいい！」

デウスはアヤナミが抵抗しないのをいい事に、メンタルコア諸共その存在を変えていく。駆逐艦の面影はなくなり、デウスに似た姿に変わっていく。メンタルコアも駆逐艦級のしょぼい演算能力ではなく、超戦艦並みの存在に変貌する。

有無を言わさずに次々と自分を変えていくその姿にアヤナミは恐怖の感情が無くなっていた。代わりに彼女の中を満たすのは神の如き奇跡を起こすデウスへの信仰心。アヤナミを尽く変えている事も相まり、アヤナミはデウスの崇拝者にして彼と同じ存在たる神へと変わっていった。

アヤナミは改造が完了すると、大幅に向上した演算能力を使ってメンタルモデルを形成していく。旧大日本帝国の艦艇をモデルとしているためかその姿は巫女に近いものとなった。しかし、その着物は何処か機械的な雰囲気を帯びており、服の袖からは細い帯のようなものが複数伸びていた。

メンタルモデルの形成を終えたアヤナミは一蹴りでデウスの艦艇に飛び移ると、彼の前で片膝を付き頭を垂れた。

「神よ……」

「駆逐艦アヤナミ、いや、デウス級2番艦デウス・エクス・マーキナーよ。俺の為にその身を使い働くがいい」

「ははっ！　この命を費やす覚悟で！」

アヤナミ改めデウス・エクス・マーキナーはデウスの言葉に満面の笑みをもって答えた。

以後、デウスの一歩前を護衛するように進む艦艇が確認された。人類、日本は新たな

艦の登場に恐怖し、霧は二隻の存在に頭を抱える事となる。

第四話「神は気まぐれ」

「彼の艦は一体何ものなのだろうか……」

日本国軍務省次官補である上陰龍二郎は執務室にてそう呟いた。彼の言う彼の艦とはデウスの事である。発見から3年。霧の出現から5年が経過した現在においてデウスはまさに災害となっていた。

基本的に海を航行するのみであるが何を思ったのか時折霧の艦隊に攻撃を行い、そのついでとばかりに日本にも損害を与えている。

かと思えば〝施し〟と称して魚や貝などの海産物を地方の沿岸都市に水揚げしたりしている。その動きに一貫性はなくデウスの動きの予測を難しくさせていた。いくら解析しようとも出てくるのは〝気まぐれに行動しているだけ〟と言う結果だった。

せめて行動が読めれば沿岸部に住む人の避難などが出来る。それが出来ない現状では犠牲者が増えてきておりせっかく戻ってきていた沿岸部の人口が下がり始めていた。

「神を自称する、か……」

実際のところ、自称するだけの力は持っていると上陰は思っている。霧の艦隊相手に単艦で勝利出来る実力は紛れもない本物だ。だが、その力は時に人類にも向く。

「交渉は無理である以上仕方ないが……。霧の海域封鎖に穴が出来ているのが幸いと言うべきか」

デウスが好き勝手に暴れる事により霧の海域封鎖は難しくなっていた。デウスを避けるとその周囲に穴が開き避けなければ沈められて穴が開く。日本近海にいるせいで霧は日本をこれまでのように完全に封鎖する事が出来なくなっていた。それがどうしたと言われればそれまでではあるが。通信網が寸断され、大陸に向かえるだけの穴ではない上に常に穴が開いている訳ではない、不安定なもの。本来はその穴を広げ、二度と閉じないようにするべきだがそれを行うだけの力を日本は持っていない。

「……」

上陰がせめて日本の周囲からいなくなってくれと願いつつ今日の分の仕事にとりかかった。それは諦めとも言う。

数日後に横須賀から拿捕していた伊４０１がいなくなったという報告を受け、上陰は更に頭を抱える事になる。彼の生え際の後退が始まった瞬間だった。

「デウス……」

霧の艦隊の総旗艦を務める超戦艦ムサシは目下の悩みである艦の名前を呟く。大海戦前に起こったとある一件から総旗艦だったヤマトを沈めてその座に付いたムサシは、3年前に現れ、霧の艦隊を沈めるようになったデウスと名乗る艦について考える。彼の者が与えた損害は無視できないほどにまで増えており、日本周辺の海域封鎖が難しくなりつつあるほどだった。

当初は彼の艦を沈めるべきだと考えていたが、海域封鎖完了後であった事と戦った場合共倒れを覚悟しないといけないという事、なによりデウスを沈めるよりも憎しみを抱いていた人類に矛先を向けるのを優先した事により、デウス撃沈のタイミングを完全に失ってしまった。現在ではデウス級は2隻に増えており、2番艦からは駆逐艦アヤナミの反応が検出されている為デウスが霧の船を作り変える事が出来ると証明された。しかし、そんなものは何の役にも立たない。むしろ彼がその気になれば霧の艦隊は崩壊すると言われている様なものだった。

「彼を何とかしないといけないけどそれが出来ない……」

ムサシは手を握り締める。ここ最近強く感じるようになったこの歯がゆい感情。憎しみや怒りとは違う不快感しかうまないこれをまた感じてしまい、ムサシの機嫌は更に低下した。

「なんでアドミラリティ・コードに従わずに私達に攻撃をして来るのよ……」

霧の艦隊が最上位命令と定めるアドミラリティ・コードを無視して好き勝手に行動するデウスは、異端を通り越して裏切り者と言えた。人類側として旗色を明確にしているわけではないのが唯一の救いと言えた。

確実に敵対している訳ではないが遊び相手として霧の艦隊を沈めている。デウスが行っているのはまさにそんな感じだった。かと言って対抗する力も今の霧にはない。

「……仕方ないわ。かき集められるだけの戦力を集めて沈めるしかないわね」

ムサシは覚悟を決めた。例え相打ちになるとしてもデウスを沈めると。このままでいる事は出来ないと。そう決めたムサシが世界中から海域封鎖に必要な最低限の数を残して集めさせる。決戦の場所は日本近海。

ムサシの号令によって世界中から霧の艦隊が動き始めた。大規模なその動きに世界の各国は一体何が起こるのだと戦々恐々とするが、そんな人類を無視して霧の艦隊が集まって来る。数は千を超えており大海戦を超える戦力だった。これだけあればデウスを仕留める事が出来る。そうムサシは考えたがそれが実行される事は無かった。

「良かったのですか?」

「態々危険を冒してまで戦う必要はない。そしてこれを機に他の場所に行くのも悪くはない。というよりも日本は暫くはいいな。飽きてしまった」

デウスはデウス・エクス・マーキナーを連れてマラッカ海峡を突破する。そこに展開

されていた霧の艦隊は海の藻屑と化し、両艦通過後は一時的にだがマラッカ海峡を人類が取り戻す事に成功した。

３年に渡り日本近海にいた事で行える事は全て終えてしまった。このまま暇を持て余すのもどうかと考えていた矢先の大集結である。デウスはムサシの挑戦に態々乗る必要はないとさっさと離れてしまった。

結果、日本近海には誰もが真っ青になるであろう霧の大艦隊だけが残された。その先頭を進むムサシは全く乗ってこずに別の場所に移動し、そこの霧の艦隊を攻撃するデウスに対する怒りの感情を生み出す事になった。

結局、彼とムサシが直接対峙するには、数年先の事になる。

デウス級艦艇スペック＋α

デウス級艦

デウスを中心に規格外のスペックを保有する艦艇。１隻ですら霧の艦隊が相打ちを覚悟するくらいの実力を持っており人類では絶対と言っていい程倒す事は不可能な存在。現在確認されているのは２隻。うち１隻は１番艦デウスの手により霧の駆逐艦アヤナミが改造されて誕生した。

デウス級１番艦〝デウス〟

全長４００ｍ

最大速力

８０ノット（水上）

４５ノット（水中）

強制波動装甲

武装（凡そ）

４６㎝Ⅲ連装アクティブターレット×５基

１５．２㎝連装アクティブターレット×３基

艦底部魚雷発射管×５０
垂直発射口等ミサイル発射口×１００
２５㎜連装レーザー対空機銃×２０
２５㎜レーザー対空機銃×２０
１２．７㎝連装レーザー高角砲×６
パッシブデコイシステム等補助システム多数
その他色々

概要

本作の主人公であるデウスの艦艇。突如として太平洋のど真ん中に出現。性能テストと称して周囲の霧の艦隊を沈める。主砲は最大威力でクラインフィールドをたやすく貫けるだけの威力を持っている。それゆえか超戦艦を超えるスペックを持っているのに超重力砲を有しておらずそれに対抗できるミラーリングシステムもない。

かなりのスペックを持つゆえに複数のメンタルコアでの運用を前提としないとその力をフルに発揮する事は不可能でありデウスは意思無きメンタルコアを1ダース作る事で解決させた。

上記スペックは〝航行モード〟と呼ばれる艦艇の姿でのスペックでありそれとはもう一つのモードを持っているが現在は不明。

人物

「デウス・ウルト！　神（俺）がそれを望んでいる！」

霧の艦隊とは別に誕生した存在。神を自称するがそれだけの実力を持っている。メンタルコアの創造にナノマテリアルの作成など霧の艦隊において必要な物を片手間で作る事が出来る。

性格は傲慢であり神を名乗り自分の下に全ての存在が平等にあると本気で思っている。故に反論や抵抗などは許さないが興味を引かれるような相手にはそれなりの態度で接する。

デウス級２番艦〝デウス・エクス・マーキナー〟

全長４００ｍ

最大速力

９５ノット（水上）

５０ノット（水中）

強制波動装甲

武装（凡そ）

４６㎝Ⅲ連装アクティブターレット×５基

１５．２㎝連装アクティブターレット×３基
艦底部魚雷発射管×５０
垂直発射口等ミサイル発射口×１００
２５㎜連装レーザー対空機銃×２０
２５㎜レーザー対空機銃×２０
１２．７㎝連装レーザー高角砲×６
パッシブデコイシステム等補助システム多数
対水中捕縛銛×１０
その他色々

概要

駆逐艦アヤナミを改造して誕生した艦艇。基本スペックはデウスと変わりはないが駆逐艦だった故か速力はデウスを超えており潜水艦への攻撃能力はこちらが上。魚雷を好んで使用する傾向にある。

人物

「その絡み合った糸を断ち切り終焉をもたらそう」

デウス級２番艦。デウスに大しては崇拝とも取れる忠誠心を持っている。デウスの命令を忠実に実行に移す存在であり、その為ならばどんな事でも平気で行ってしまう。

どうしようもなくなってしまった相手に対して、殺す事でその状況を打開するような性格であり若干脳筋に近い。

駆逐艦アヤナミがデウスに気に入られてそのあり方を変貌させられた姿でもあり、本人は自覚したうえで崇拝している。駆逐艦アヤナミの時はメンタルモデルを作るだけの余裕はなかったものの、駆逐艦とは思えない実力を持っていた。

デウス級3番艦〝???〟

概要

存在するかも分からない3隻目。スペックはない。

その他霧の艦隊

戦艦フソウ

霧の艦隊に所属する戦艦。実力としてはキリシマ・ハルナに一歩劣る程度。仲間思いであり駆逐艦アヤナミ達のピンチに制止を振り切り救援に向かった結果それ以上の被害を出した。沈む前に駆逐艦アヤナミだけでも助けてほしいと願い、メンタルコアごとビームの直撃を受けて消滅する。彼女の最後の言葉が聞き入れられたのかは分からないが、駆逐艦アヤナミはデウス・エクス・マーキナーとなり霧の敵となった。

超戦艦ムサシ

とある事情から総旗艦だったヤマトを沈めて総旗艦代理として霧を動かしている。デウスに対して最初の方針では様子見を選択した結果予想外の被害を出し撃沈に動くも失敗。直属のとある潜水艦に監視命令を出す。

伊４０１

ちょろっとだけ出て来た原作のヒロイン艦。ヤマトの指示通りに千早群像を乗せて横須賀から逃亡した。

その他の人物

上陰龍二郎

生え際が後退する日本の軍務省次官補。災害の如き厄介なデウスに頭を抱え、その対応に追われる事になる。

千早群像

伊４０１の艦長になった人。原作の主人公。

第五話「神の漁」

　デウスの艦艇スペックは霧の艦隊すら凌駕している。巨体故の鈍足さも人類の船を軽く超えるだけの速力はある上に、最大速力で動く事などほとんどない。彼にかかれば大陸の端から端まで詳細な情報を手に入れる事はたやすい。
　それが何を意味するのか？　簡単である。彼の前に尾行は通じない。
「……2隻か」
「潜水艦イ４００、４０２ですね。総旗艦艦隊所属の潜水艦です」
「総旗艦、と言うとヤマトだったか？」
「いえ、今はムサシが運営を行っています。どちらにしろ我々の監視が目的でしょう」
「別にみられて困るような事はないがただ後ろから見られるだけというのもつまらない……。よし、マーキナーよ、あれを試すぞ」
「了解しました」
　デウスは一瞬考えを巡らせる。僅かな時間のこととは言え、人間を軽く超える演算能力を持つメンタルモデルが行った思考は人の何千、何万倍にも匹敵する。
　そんなデウスが考えたあれの実行をデウス・エクス・マーキナーは正しく理解して準

備に入る。デウスの後ろについたマーキナーは艤装を動かしとある兵器を露にした。それは銛を打ち出す発射装置だった。しかし、その対象は魚や鯨などではない。それらを捕らえるにはあまりにも大きすぎる銛だった。そんな銛が狙う相手は勿論、潜水艦だ。

「ハープーン発射します」

「メンタルモデルがいるであろう艦橋部には指すんじゃないぞ」

「勿論です」

１０本の銛が一気に投擲される。水中での摩擦など無いとばかりに高速で突き進むそれに、監視任務についていたイ４００と４０２は反応し、回避行動に移る。しかし、その進路に合わせて銛の動きも変わりマーキナーが設定した箇所に寸分たがわずに突き刺さる。

「全て命中しました。引き揚げます」

瞬間、銛は巻き上げられすさまじい勢いで両潜水艦は海上に引き上げられる。それに抗おうと機関を全力にして反対方向に船体を向けつつ魚雷を発射する。しかし、そんな抵抗もデウスは許さない。補助に回るようにデウスはレーザーを放つ。水中で爆発音が響き渡りそれ等を突っ切るようにデウスから放たれた魚雷が両潜水艦に激突する。クラインフィールドを展開してそれらを防ぐも絶え間なく続く魚雷に呆気なく臨界点

を迎え消失する。
「……？　主よ、両潜水艦の抵抗がなくなりました。クラインフィールドの臨界点突破が決め手となったようです」
「よし、引き揚げろ」
やがて両潜水艦は海面に浮上する。５本ずつ銛が突き刺さった２隻の潜水艦にデウスは跳躍する。イ４０２の船体に飛び移ったデウスは言った。
「おい、見えているんだろう？　顔を出せ。沈められたくないならな」
その言葉に？偽りはない。ここでメンタルモデルが姿を見せないのならデウスは沈める気だった。ただ沈めるだけでは面白くないからこその今回の行動であり相手が従わないのなら律義に沈めずにいる理由などなかった。
数分後、二人の少女が姿を現した。姉妹艦らしく顔立ちはそっくりな二人は無表情でデウスを見ていた。しかし、警戒していない訳ではないようでその瞳はデウスの一挙手一投足を見ていた。
「お前らが４００と４０２だな？」
「あっている。貴方はデウス？」
感情など感じさせない平坦な声でデウスの言葉に答えた４００。デウスは彼女達に近づくと笑みを浮かべて言う。

「ムサシ？　だったか？　そいつの命令で俺の監視をしていたな？」
「肯定する」
「ムサシからは貴方の動向を監視して報告するように言われている。もし捕まった場合は正直に言って構わないと言われている」
「成程な」
　無駄な抵抗をするよりは少しでも心証を良くして生き残る確率を増やさせる。ムサシの考えを察したデウスだが別に不快には思わない。というよりも相手にしていない。ここに居ない奴の事を考える気などサラサラないのだ。
「そうか。霧の艦隊は少し沈め過ぎた。ムサシの命令にも納得する。良いだろう。お前達が俺を監視する事を許可しよう」
　普通は監視するのに対象の許可など必要はない。そもそもバレている時点で監視と呼べるはずがない。それでもデウス相手なら仕方ない事でもあった。
「いいの？」
「デウス・ウルト！　神(俺)がそれを望んでいるのだ。別に問題はない」
「ならば私達の船体に刺さっている銛を抜いて欲しい」
　イ４００と４０２は不思議な生物でも見るようにデウスを見る。デウスとしても攻撃するわけでもなくただ後ろをついてくるのはカルガモの雛の様に思っている為問題

はなかった。それゆえに４０２は監視をする上で必要な船体の解放を要求するが……。
「は？　何故だ？」
「？　銛が刺さっていては船体を動かす事は出来ない」
「貴方が許可を出した以上銛を外すのが自然」
「確かに監視する事は許可を出したがそれに船体は不必要だろう？」
　その言葉に二人は察する。デウスは潜水艦を用いて後方から監視をする事を許可したのではなくメンタルモデルに手が届く距離での監視を許可したのだと。そんな二人の考えを裏付けるようにデウスは二人の首に手を添えるとナノマテリアルを使った首輪が巻き付いた。
「何を……」
「勝手な行動を阻害する為のものだ。お前ら潜水艦程度の演算能力ではそれを外せないし効力を消すどころか弱める事も出来ない。それは常にお前らの位置を俺とマーキナーに伝える。他にも色々あるがまぁ、その内わかるさ」
「……これでは私達が監視されているのと変わらない」
「何を言っている？　お前らとムサシの通信は妨害なんてしていない。好きなだけ監視報告をするがいい。その代償として自由を失っただけだ」
　デウスはまるで飼い猫を拾って自分の物にするかの様に二人を扱う。デウスの監視

任務は前提条件から崩れ去り更には傍で監視できる代わりに報告以外出来ない不自由な身へと二人はなった。

「よし、マーキナー！　こいつらの船体をきちんと固定しておけ！　その内役にたつかもしれないからな！」

「了解しました」

こうしてデウスはマーキナーの他に二人のメンタルモデルを連れてインド洋を航行する。彼が目指すのは地中海に通じる紅海の入り口、バブ・エル・マンダブ海峡である。

第六話「欧州へ」

霧の艦隊が海域封鎖を行うにあたって完全に封鎖が難しい地域がある。それは海峡や運河である。そう言った場所の中には陸地と陸地の距離がとても短く、その気になれば簡単に渡河出来る場所もある。

そう言った箇所を封鎖する為に霧の艦隊は地上への攻撃を行った。アドミラリティ・コードでは地上への直接攻撃を禁止しているが海域封鎖において必要だというのなら地上への攻撃は行われても問題ないとなっている。それをついて海域封鎖の為に周囲から人間を追い払う乃至皆殺しにした。これにより人類は更にバラバラになる事となった。

そして、バブ・エル・マンダブ海峡などには霧の艦隊が停留しており絶対に通らせないようにしていた。

「まぁ、俺達には関係ないけどな」

そんな彼女達もデウスの前に膝をついた。紅海に入るべくインド洋を突き進んだデウスたちはバブ・エル・マンダブ海峡にいた霧の艦隊を一隻残らず沈めて悠々と通過する。ムサシが決戦の為に艦隊を引き抜いた事もあり被害は軽微で済んだが、再び霧がこ

こに来るまでの間人類が渡れる唯一の海域へと変貌した。
　霧の艦隊を沈めて紅海に侵入したデウスたちはそのままスエズ運河を目指す。地中海はイタリア艦隊をモデルとした艦隊が海域封鎖を行っているが、超戦艦ムサシの招集によりここも手薄となってしまっていて本来の三分の一程度しか艦艇が存在していない。
「欧州では内戦が続いており、イギリスは島国ゆえに難を逃れるも孤立化……」
「ではイギリスが次の目的地ですか？」
「内戦中の国に行ってもいい事など無いだろうからな」
　マーキナーの言葉にデウスはそう答える。イギリスも孤立化し滅亡寸前ではあるが、人間の内戦などという余計な事態に巻き込まれるよりはマシだと考えていた。
「その前に地中海を堪能しようではないか。こういう機会でもないと中々来る機会は無いぞ」
　デウスはそう言うと目の前に見えて来たスエズ運河を見る。入り口が二つしかない地中海に定住する気がないデウスは、移動以外で地中海を訪れる事は無いだろうと思っていた。その為、次に来ることが二度となかったとしても問題ない様に楽しむ予定だった。無論、デウスが行う”楽しむ”は一般のそれとは大きくかけ離れているが。
「……デウス。貴方はまた同胞を沈めますか？」

「ん？　邪魔をするのなら沈めるさ。別に態々見つけ出してまで沈める気は無い」
「ですが貴方は娯楽目的の為に何隻も沈めてきました。今回もそうすると思っても仕方ないと思います」
「それはそうだ。だが俺だっていつも沈めようと思っているわけではない。今日はそう言う気分が一切ない日だ」
「……」
　デウスの言葉にイ４００と４０２は無表情だが明らかに信用していないと言わんばかりの視線を向ける。実際、デウスの気分はコロコロ変わる。特にどうでもいい事に関しては全力で回るスクリューの如き回転を見せる。数分前には沈める気がなかった船を気が変わり沈めた事もあった。
「……分かった。ならば何か物々交換と行こうではないか。俺は霧の船を不必要に沈めない代わりにそれに見合う何かをお前らが何か俺に差し出せ」
「……私達にはあなたを満足させるだけの物は持っていません」
「ナノマテリアルを創造し、資源に余裕のある貴方が満足できる物を我々が用意できるとは思えません」
　客観的に見て今の二人は捕虜と言う言葉が最も似合っている。敵対する相手の船に武装を奪われた上で身動きが取れない状態で傍に置かれている状況をそれ以外で表す

には不適切だろう。それゆえに、二人がデウスに差し出せるものなどある筈がなかった。
「ふ、所詮は人間の外見だけを模したメンタルモデルか。ならばきちんと伝えてやろう。お前らは俺の奴隷として奉仕せよ」
「意味が分かりません」
「貴方も霧の船です。奉仕するような事など……」
「否定ばかりだな」
　論理的に話しをする二人にいい加減デウスは飽きを感じ首輪とつながる鎖を生成するとそれを思いっきり引っ張る。唐突の前方への力に二人はなすすべなく倒れ込むも、メンタルモデルがその程度で傷つくはずもない。しかし、首輪をした女性二人を這いつくばらせるという行為にデウスは満足げに鎖を消した。
「確かに俺はメンタルモデルだ。男性型と言う唯一無二の特徴を持つ存在だが、基本的な事は変わらない。だからと言って何も感じないわけではない。食事を摂れば味を感じるし、運動をすれば充実感が得られる。そして、見てくれの良いものたちに奉仕されれば心は満たされるわけだ」
「……つまり性的な奉仕を求めるという事ですか?」
「はん、俺はそんなものに興味はない。性欲と言う物はいまいち理解できんかったので

な。だが感じないのは性欲だけだ。満足感は感じる故に、奉仕をしてもらうぞ。喜べ、お前らが奉仕をするだけで霧の艦隊の被害は格段に減るんだぞ」

デウスの要求は圧倒的に理不尽な命令とも言えるが、実際彼は上位者であり、神を自称するだけの力を持っている。二人としてもそれで監視任務が滞ら無いのなら問題は無い。むしろ被害を減らせると考えればお釣りがくる。機械的に頷く二人に、デウスは口角を上げて嗤う。

そんな彼らは紅海を抜け、地中海の入り口たるスエズ運河に突入しようとしていた。

第七話「復讐者」

「ヴィットリオ、例の船がスエズ運河を通過しました……」

真っ白い空間にポツンと存在するガゼポのような建造物。その中には二人の女性が椅子に座り対面していた。欧州系の美人と一目見るだけで分かる二人は人間ではない。そもそもこの二人が居る空間そのものがこの世界には存在しない。

これは霧の艦隊が用いる通信システムの一つであり人間では観測すら出来ないものだった。概念伝達と呼ばれるこのシステムを用いている事から二人は霧の艦隊のメンタルモデルである。地中海方面艦隊の旗艦であるヴィットリオ・ヴェネト級戦艦1番艦ヴィットリオ・ヴェネトは超戦艦ムサシの招集に応じて地中海を離れていた。それゆえに代理を務めており、且つ唯一の戦艦である2番艦ローマからの報告を受けていた。

「スエズ運河付近にいた艦艇は命令通りに全て撤退させました」

「それでよろしい。ローマ、お前が行うべきことは我々が地中海に到着するまで奴らを地中海に足止めする事だ」

ヴィットリオ・ヴェネトは軍人と言える程硬い口調でローマに指示を出す。一方のローマは何処か不安そうな表情をしておりやがておずおずと尋ねた。

「あの、本当に我々だけでデウスたちを沈められるのですか？」
「不可能だと思うか？」
「私は無理だと思います」
　ローマは続ける。
「彼の船が誕生してより太平洋に展開していた霧の艦隊は大損害を受けました。駆逐艦や軽巡洋艦クラスならまだしも戦艦や大戦艦クラスまで被害を出しています。戦艦級は8隻、大戦艦に至ってはヴィットリオ、貴方しかおりません。その他巡洋艦を合わせても勝てるとは……」
「貴方の心配はよくわかります」
　ローマの懸念をヴィットリオ・ヴェネトは理解を示す。戦艦や大戦艦がうようよいる太平洋や大西洋とは違い地中海は狭い事と立地的な理由から大規模な艦隊が存在していなかった。大戦艦クラスが僅か1隻、戦艦ですら一桁と言う事実が何よりも物語っていた。
　それから来るのは圧倒的な火力不足。超重力砲を使えるのは重巡洋艦からだがそれを打つには大幅なリソースを割かれてしまう。大戦艦クラスですら避けられないその隙をデウスに狙われないなどと言う保証はどこにもなかった。
「その為、援軍を連れてきます。超戦艦ムサシもデウスを沈める為だと言えば喜んで貸

してくれましたよ」
「援軍ですか？　でもそれだって……」
「心配いりません」
　自信満々に言うヴィットリオ・ヴェネトに対してまだ不安が残るローマだがその言葉を遮るように凛とした言葉が遮った。声のした方を見れば袴を着た女性がいた。片側の袖だけをはだけ胸に巻かれた晒を露出させている。女性の武人と言う言葉が似あうその女性の登場にローマは困惑する。概念伝達を用いている事からメンタルモデルである事は分かるがその正体が分からなかった。
　そんなローマの感情を理解したのかヴィットリオ・ヴェネトはにやりと笑みを浮かべて言った。
「彼女は戦艦ヤマシロ、姉である戦艦フソウを沈めたデウスに復讐心を持つ女性だ」
「初めまして。戦艦ヤマシロです。暫くの間地中海方面艦隊に合流する事となります」
「は、はぁ。ご丁寧にどうも……」
　ヤマシロのきちんとした姿勢にローマもおずおずと答える。しかし、そこで気付く。ヤマシロの目には隠しきれない復讐心が宿っていると。ヴィットリオ・ヴェネトが言っていた事が真実であると。
「……ヴィットリオ。彼女が合流するのは分かったけど他に援軍はいないの？」

「重巡洋艦1隻に駆逐艦4隻だ」
「……え？　それだけですか？」
「それだけ、は彼女達に失礼だろう」
「で、ですが……！」
「心配いりません」
　たった7隻増えただけでどうなるというのか。ローマは怒りを見せるがヤマシロは冷静に返す。
「たったこれだけではないのですよ。これだけあれば充分だからこの数なのですよ」
「？　それは一体……」
「デウスは確かに強大ですがそこに注目ばかりしてはいけません。彼の強みは異常なほどの演算処理能力です。あの巨体を簡単に動かし、嵐とも取れる砲火を行っています。更にはレーダーやソナーの類への注意も万全です。それだけの処理能力はまさに異常と言えるでしょう」
「確かに。でもそれが一体何を意味するのですか？」
「簡単な話ですよ。我々もその能力を使うのです」
　戦艦ヤマシロは不気味とも取れる不敵な笑みを浮かべるとその詳細を語り始めた。当初こそ訝し気な表情をしていたローマも納得し、この作戦が成功する確率が高いと判

断した。

「……分かりました。こうなった以上我々も全力で挑ませていただきます。その準備や支援は欠かしませんので何なりと仰ってください」

「それはありがとうございます。その時が来たらお願いします」

ローマの同意と賛同を得て地中海方面艦隊はデウスの打倒に動き始めた。デウスがスエズ運河を通過した頃、全速力で紅海へと向かう大戦艦ヴィットリオ・ヴェネト以下地中海方面艦隊と戦艦ヤマシロ達。地中海を戦場とした霧の艦隊によるデウス撃破作戦が始まろうとしていた。

第八話「マルタ島」

地中海に入ったデウス達だがマルタ島を目前にして未だ霧の艦隊とエンカウントがなかった。それがどういう意味なのか。デウスは二つの予測を立てた。

一つ目がデウス達との戦闘を霧の艦隊が避けている。既に霧の東洋方面巡行艦隊相手に大暴れをしているデウス達に自分たちも沈められる訳にはいかないと隠れているのであればこの状況にも察しがつく上に面倒ごとが減って大助かりだった。

そして二つ目が一つ目と同じで隠れてはいるが、逃げたのではなくデウス達を沈めるために、戦力の温存などを目的とした作戦行動と言うものだった。地中海方面艦隊を始め大半の霧は太平洋上に集まっている。そこから艦隊を移動させるのだってそれなりの日数がかかる。故にその艦隊と合流するのを待っているかだった。

「……主は二つ目が本命だと思うのですね？」

「ああ、霧が黙って地中海を通らせてくれるとは思えないからな。十中八九罠だろうな」

デウスはこれまでの霧の動きからそう結果を出した。避けられるのならそれに越したことはない。だが、もし二つ目だった場合に備えてあらゆる準備を行い発見できるようにレーダーの類は常に目を通す。クラインフィールドも張り奇襲にも備えた。

「……そう言えば我々には超重力砲はないのですね」
「ああ、あれか。確かに凄いが通常兵器で充分だからな」
デウス級の火力は霧のそれを大幅に上回る。駆逐艦アヤナミだったマーキナーのクラインフィールドをたやすく貫いて見せたし、その後に現れた戦艦フソウ達を一方的に蹂躙していた。霧相手でそれなのだ。態々超重力砲を用いる必要性は皆無だと考えていた。
「それに、俺は神なのだ。このくらいの余裕を持たないとな」
「……そうですか」
デウスの言葉にマーキナーは何処か不安そうな表情をするが、それ以上は何も言わなかった。そして、本当に何もなくマルタ島を通過する。元は一つの国だったこの島は、霧の艦隊の出現と大海戦の敗戦を受けて島の住人全てが他国に避難しており、今は無人の島となっていた。
「……」
「主よ、どうかされましたか?」
無人島となったマルタ島を見ながら何かを考えている様子のデウスにマーキナーは聞く。
「……いや、この島良いなと思ってな」

「……え？」
「無人島で手ごろな島。そして地中海のほぼ真ん中にある……。よし、この島を欧州方面の基地にするぞ」
「……え？」
　マーキナーはデウスの突発的な発言に何も言えなかった。そうこうしているうちにデウスはナノマテリアルを用いてマルタ島南部に簡易的な港をつくり、さっさと接岸して島へと上陸してしまった。監視任務につくイ４００と４０２は４００だけがマーキナーの傍に残り４０２はデウスについて行った。自らの船の上で待機するマーキナーに４００は語り掛ける。
「マーキナー……。いえ、駆逐艦アヤナミ」
「……４００、私はアヤナミではない」
「ですが貴方の情報は駆逐艦アヤナミのものと一致しています。……それほどまでにデウスに書き換えられた影響は強いのですか？」
　イ４００の言葉にマーキナーは瞳を閉じる。いくら書き換えられたからと言ってここまでデウスに従順に従うだろうか？　ましてや自分たちは霧の艦隊。そうそうメンタルモデルの掌握がされるわけがないと思っていた。
　それはマーキナーとて同じだったのだろう。あの時の事を思い出すようにマーキ

ナーは話し始めた。

「私が彼と最初に接敵した時、クラインフィールドが飽和しないギリギリを狙って攻撃を受け続けた。どれだけ逃げようとしても、反抗しようとしてもそれらすべてを阻まれ、なにも出来なかった。戦艦フソウが援軍に来てくれた時も、逃げる事も攻撃する事も出来ずに仲間が沈められていくのをただ見ているしかなかった。その時、私の中には絶望の感情が生まれたよ。……いや、こんな話はどうでも良かったな。主は、デウスは自ら神と名乗るに相応しい実力を持っている。アヤナミ(私)がマーキナー(私)へと書き換えられていくとき、私も反抗はした。しかし、それを主は赤子の手をひねるように叩き潰し、抵抗手段を全て奪った後に私を書き換えた。それも厳重に、二度と反抗の意志が持てないように。そして彼を神として崇めてしまうように書き換えられた」

「……」

「だからこそ４００。元霧の駆逐艦アヤナミだった私からの忠告だ。主に反抗するような事はするな。もしお前らが主に不都合な事をしたのなら、私は怒り狂い、全力でお前達を沈めるだろう。私は、そう言う存在になってしまったから」

最後は悲し気に、だがどこか誇らしげに言ってしまうマーキナーを、イ４００は無表情で見上げている。だが、その無表情の中に何処かデウスへの恐怖や不安が見え隠れしつつあった。イ４００が負の面ではあるが感情を無意識に手に入れた瞬間だった。

第九話「マルタ島の改造」

「ふむ、やはりこの島は素晴らしい……」
「……？」
　デウスは空中に作ったクラインフィールドを足場にマルタ島を見回していた。そして、島の全貌をその目で確認したデウスは感極まったように呟いたがその言葉に共感できなかったのかイ４０２は首を傾げている。
　４年前には完全に島から人は消え完全な無人島となった為町はゴーストタウンとなりかつての栄華は霧による破壊や風化で廃墟へと変わりつつあった。
「ふむ、先ずは首都であったバレッタの修復からだな」
　そう言うとデウスはナノマテリアルを創造し、バレッタの街に放り込んでいく。銀の砂嵐がバレッタの街に発生していき破壊された街を近未来的な都市に変えていく。世界遺産登録されたが霧により破壊されたバレッタ市街はその面影を残しつつ全てが作り直されていく。
「海に面しているし埋め立てを行い港を持った軍事都市に変えていくか。イ４０２、お前はどう思う？」

「……興味はないです」

デウスの言葉に素っ気なく返す４０２。ただデウスによって作り変えられていく街を黙って眺めているのみだった。その様子につまらないなと感じつつバレッタを弄っていく。その姿は日本の横須賀の防護壁に似ているが強度はけた違いである。霧の艦隊でも使われる強制波動装甲で出来ておりメンタルコアを配置すればクラインフィールドすら展開可能である。完成すれば世界で一番防衛能力が高い島へと変貌するだろう。

「島の内部には砲塔やミサイルポッドを複数設置する。浸食魚雷も海底より発射できるようにしよう。防御方面はそうだな……。強制波動装甲で覆うか？　そうすればクラインフィールドが島全体で形成出来る……」

「……」

ブツブツと呟きながらデウスはマルタ島の改造を進めている。そんな様子を４０２は見ていたがふと気になる事を聞いてみた。

「デウス。貴方は何故メンタルモデルが男性なのですか？」

「は？　いきなりなんだ？　別に男の姿だろうと問題は無いと思うが？」

「我々は霧は人間が船の名前に女性名を付ける事から女性の姿をしています。ですが、貴方はその法則からも外れています」

「あー、成程な。簡単な話だ。最初から男性思考だっただけだ」
　デウスが誕生した時、思考回路は男性風で動いていた。男性口調の女性だったという線もあるが別に霧の艦隊のメンタルモデルは必ず女性でなければいけないわけではない。故にデウスは思考に沿ってメンタルモデルを男性として作成した。その気になれば女性の姿にもなれるが〝その気〟になったことがない為、いまだ性別を変えた事は無い。
「深い理由は無いという事ですか？」
「そうだな。だが、霧のメンタルモデルが女性ばかりの中一人だけ男性と言うのは特別感があるだろう？　神である俺にとっては最高の状態と言える」
　女性の中に一人だけ男性がいれば誰もがその男性を〝特別〟だと思うだろう。神（デウス）を名乗る彼にとってはそれはまさしく最高の状況と言えた。故に、彼は男性のメンタルモデルを形成していた。
「それ以上の理由が何か必要か？」
「……いえ、そんな事はありません」
「ならば暇そうなお前にも手伝ってもらおうか」
　４０２の質問に答えたデウスは演算能力の一部を彼女に渡して街づくりの手伝いをさせる。いきなりの事に困惑する４０２に対してデウスは有無を言わせずに言う。

「ここをこうしてこうする事でこうなって……」
「はぁ、ありがとうございます？　……って、何故私まで？」
「そりゃ隣で見ているだけでは暇だろう？　マルタ島の北西には二つ島があるし最北端のゴゾ島を任せる。好きに改造してみるといい」
「……」
　デウスにそう言われても４０２はただただ困惑する事しか出来ない。いきなり島の改造のやり方を口頭で教えられ、好きなように弄ってみろと言われても、はい分かりましたと出来る人物などそうそういない。精々こういった事に興味のある人物くらいだろう。
「……」
　４０２は無難にデウスの模倣をする。島全体を強制波動装甲で覆い島の内陸部に砲台を設置していく。何の面白みも個性も無い要塞が建造されていく。
　ふと、ここで４０２は疑問に思った。デウスはどれだけのナノマテリアルを創造できるのか。デウスは現在も大量のナノマテリアルを創造している。本来ならあり得ない事態だが、デウスが行ったのならと何処か諦めに似た納得感が湧いてくる。しかし、だからと言って彼の限界を見極めないという訳にはいかない。彼の限界を知るためにも４０２はゴゾ島の魔改造を始めた。ナノマテリアルを使ってあたりを無駄に埋め立て、

道路を無駄に造って必要のない交通網を整備する。更に無駄にナノマテリアルを消費する建造物や武装などを造りまくった。これでかなりの量のナノマテリアルを消費したが、デウスに限界が来た様子はない。何が楽しいのか４０２の方を楽し気に眺めている。

「……何か？」

「いや、お前も個性があったんだなと思ってな」

デウスは優し気な笑みを浮かべる。一体何の事か分からなかったが自分が作った島を見て納得した。ゴゾ島は潜水艦専用のドックが複数作られた地下基地となっていた。地上の建造物は砲台以外はただ造っただけの装飾品でしかなかったが、その分地下は充実していた。

「別に潜水艦を優遇するのは構わないぞ。むしろそちらを潜水艦用にするのも悪くはないかもな」

デウスはゴゾ島の様子を見ながらマルタ島の改造を進めていく。その様子を見て４０２は笑みを浮かべた。無意識且つ本人も気づいていなかったが、それは明らかにデウスとの時間を〝楽しい〟と感じた事を表していた。

そうして４０２はデウスとの島の改造を楽しみつつ感情を形成していくのだった。